
TERRAFORMARS
THE OUTER MISSION

壁も天井も床も、全てが灰色のコンクリート製の部屋の中で、独り。
分厚い耐衝撃透明アクリルの隔壁越しに、真っ黒いそれと対峙する。
部屋から出られる条件は、一つ。それを無力化すること。
部屋の広さは、二〇メートル四方程度だ。
決して広いとはいえず、身を隠せるような場所もない。
それと、闘うしかないのだ。
トーヘイ・タチバナは、それの感情を感じさせない黒い眼球を見据えつつ、思う。
――僕は、宇宙飛行士になって、火星に行きたかっただけなのに。
――何でこんな化け物と、闘うことになっているんだろう？
それは、アクリルの隔壁に興味あるのか、ぺたぺたと手で触っている。
身長はおよそ二メートル、体重は約一一〇キログラム。
打撃系格闘家のような筋骨隆々とした身体は、全身がくまなく、ぬらりと黒光りしている。
その強固な黒い肌は、虫の外骨格と成分と構造が似たものだ。
尻には、尾葉と呼ばれる二本の感覚器が生え、苔のような髪がへばりついた頭には、一対の触角がある。それらは、地球上では有名なあの害虫の王――
ゴキブリの特徴である。
それは、四〇年ほど前に火星で発見された、人類の敵だ。
テラフォーマー。

約五〇〇年前。資源の尽きかけた地球に増えすぎた人類は、新天地を得るべく火星の地球環境下化を試みた。
当時の科学者たちの計画は、シンプルだが確実なものだ。
大気のほとんどが二酸化炭素で極寒冷状態の火星でも繁茂できる特殊な黒い苔と、その苔をエサに繁殖できる、生命力の強い昆虫、ゴキブリを火星に送り込む。
火星の初期の過酷な環境にも耐えうるよう改良されたゴキブリは、充分な食料があり天敵のいない環境で、爆発的に増加する。死んだゴキブリを養分に苔がさらに増え、苔が光合成する酸素と苔そのものをエサに、さらにゴキブリが増える。
そうして火星の地表を苔とゴキブリで黒く染め上げることで気温を上げ、人間が生息可能になるまで大気の酸素濃度を上げる。
この試みは、五〇〇年という歳月を経て成功した。今の火星は、地球の山岳地帯に近い環境になり、かろうじて人が生存できるようになっている。
テラフォーミングは成功したが、想定外の問題も発生していた。
それは、火星に送り込んだゴキブリが、生物の歴史においては刹那とも言えるわずか五〇〇年の間に、原人レベルにまで進化してしまっていたことだ。
二五七七年。有人宇宙船バグズ一号は、調査のために火星に向かい、テラフォーマーと人類は初めて、遭遇した。結果はバグズ一号乗務員全員死亡という惨憺たるもので、人類が得たものは、殺害したテラフォーマーの頭部ただ一つだった。

トーヘイの前、隔壁の向こうにいるテラフォーマーは、その頭部の細胞からクローンで増やされたものの一体である。

テラフォーマーは、人間がゴキブリを発見すると条件反射のように退治するのと同様に、人間に対して本能的な敵意と害意を持っている。

人類の天敵と呼ぶべき存在。それが、テラフォーマーなのだ。

『トーヘイ』と、天井の隅から女の声が聞こえてきた。

天井の四隅。室内の様子を記録するカメラと、万一に備えた高出力レーザー銃座と一緒に、集音マイクとスピーカーが設置されている。女の声は、そのスピーカーからだ。

『もう一度、説明しておくわよ。そのテラフォーマーは、訓練用に戦闘力を総合的に三〇パーセントほど落として培養されている。それでも、普通の人間を簡単に殺せるのに変わりはないわ。そう、普通の人間ならね』

「わかってます、ジャニスさん。僕は、コイツに殺されない力を持っている、ですよね」

声の主の名は、ジャニス・リー。U―NASAこと国連航空宇宙局の、哺乳類型M.O.手術担当チーム所属の女だ。

ここは、ワシントンD.C.にあるU―NASAの施設の一室である。

『そうよ。あなたに施されたM.O.手術は、哺乳類型。昆虫型ほどの戦闘力はないわ。でも、あなたが特性を得たあの生物なら、テラフォーマーと一対一なら充分以上に戦える――何せ、相手はゴキブリなのだから』

テラフォーマーがたった五〇〇年でゴキブリから人に似た姿にまで進化できた要因の一つに、テラフォーマーが有する免疫寛容臓の存在がある。

その免疫寛容臓を人間に移植し、別生物の遺伝子を無理矢理に人体に組み込む技術。

それが、M.O.手術である。

M.O.手術の成功率は、現在、三八パーセント。失敗した場合、たいていの被験者は死ぬ。だが、ごく稀に失敗しても死なない人間もいる。トーヘイは、その失敗作の一人だ。

『残念なことに、トーヘイ。あなたの免疫寛容臓の適合率は低かった。手術は一応成功したけれど、生涯、大量の免疫抑制剤を服用し続けなければならない。そんな欠陥品を、火星に送り込むわけにはいかないわ』

U―NASAは近く、アネックス一号という大型宇宙船を調査と研究のために、火星に送り込む。

M.O.手術は、アネックス一号搭乗員が、火星という過酷な環境に耐え、そして想定されるテラフォーマーとの戦闘に対応するために、施されるものだ。

手術が完全な成功と言えない以上、トーヘイが、火星に行くことはない。

「わかってます。地上での万一に備えたバックアップ要員。それが、僕の今後の役割なんですよね。U―NASAに居さえすれば、火星は無理だとしても、いつか、宇宙に行けるかもしれない。そのためには、まず……コイツを倒してみせろ、ということですよね」

『そういうこと。役に立たない人材を飼うほど、ここは優しい組織ではないわ。たとえそれが、

ペットに適した特性を持つ人間だとしてもね』

ジャニスの口調は、嘲りを感じさせた。トーヘイは、むすっとして呟く。

「――僕のM・O・手術のベース生物をペットにする奴なんか、いるものか」

その呟きが、ジャニスに聞こえたのか、聞こえなかったのか。ジャニスが話を進める。

『まず変身してみせなさい。変身できてようやく、M・O・手術が本当に意味で失敗しなかったと評価できるわ。今のあなたは、手術が成功とは言えず、ただ死ななかっただけなのよ』

わかっているわね、実験動物。

そうジャニスは口にしなかったが、言葉の裏にそんな意味があるようにトーヘイは感じた。

いらっとしたが、ここで文句を付けても意味はない。トーヘイは淡々と告げる。

「わかってます。とにかく僕は変身して、コイツを倒さなければ宇宙を目指す資格がない、ということですよね」

『そういうこと。このテラフォーマーを倒せれば、君はアネックスクルーの戦闘メンバー準拠の待遇で、U―NASAの正式な職員になれる』

「……」トーヘイは無言で、ジャニスの次の言葉を待った。

『大丈夫、心配はいらないわ、誰にでも初めてはあるものよ。生まれ変わった気分を味わえるわ、ちょっと苦しいかもしれないけれど。それじゃ、始めなさい』

――本当に、他人事のように言うよね、この人。まあ、他人事なんだろうけど。

ここで自分がゴキブリに殺されようが、ジャニスは何も思わず、ただ、死体の処分を係の人

間に命じるだけだろう。死体はおそらくM・O・手術研究の一環として検死をした後にバラバラにされ、防腐処理を施してサンプルになるだけだ。

いつか宇宙に行けるかもしれないという可能性と引き替えに、トーヘイは、自分をU―NASAに売った。元より孤児の施設出身だから、死体の返却を望むものもいない。

「三八パーセントという生存確率には勝ったんだ。こんなところで死ねるか」

ぶつぶつとこぼし、トーヘイは、やってやるさと口の中だけで呟くと、手にしていたシールタイプの変身薬を無造作に首筋に貼り付けた。

「!?」途端、首から全身に感電したような衝撃が走った。

全ての細胞が粟立つような感覚。ありとあらゆる神経が引っこ抜かれ、瞬時にして新しい神経が全身に張り巡らされるような、痛み。

みしみしと全身の骨が軋み、一瞬、視界がブラックアウトする。頭が中から爆砕したんじゃないか、とトーヘイは思った。

「……」視界はすぐに戻った。

トーヘイは、ちらりと自分の手に視線を落とした。訓練用コスチュームで肌が出ているのは、両手両足の先と、首から上だけだ。

手の肌の質感が、人のそれとは異なっていた。厚くはないが、多糖類アミロースの甲殻に覆われている。この肌の変化が、M・O・手術の特徴の一つだ。

両手の甲に、ナックルガードに近い形状の白く鋭い刃が備わっている。

手足の指も元より長くなり、全てに鋭い爪が備わっていた。
それらを見て、トーヘイは納得する。
「なるほどね。説明された通りだ」
鼻の両側から生えたヒゲが、わずかな空気の動きを敏感に捉える。ズボンにあらかじめ用意された穴から伸びた、己の背ほども長さがある尾に、違和感はない。
学名、Rattus norvegicus——ドブネズミ。
それが、トーヘイに施されたM・O・手術（モザイク・オーガン・オペレーション）のベース生物である。
ドブネズミは、ゴキブリを狩り、捕食する数少ない種類の哺乳類だ。
隔壁（かくへき）の向こうで、テラフォーマーがぎくりと身を固くした。
テラフォーマーは、ゴキブリから進化した生物だ。本能的にネズミが天敵だとわかるらしい。
これまで隔壁にしか興味がなさそうだったテラフォーマーが、明らかにトーヘイを意識している。
『変身は成功したようね。隔壁を開けるわ。さあ、頑張って』
ジャニスの声が途絶えると同時に、ずずっと隔壁が上にスライドし始めた。
隔壁が開ききる前に、テラフォーマーが、ばっと身を低くした。あらゆる隙間（すきま）を自在に移動するゴキブリさながらの動きで、隔壁の下をくぐる。
「ちょ」トーヘイが焦ったその時にはもう、目の前に、テラフォーマーの無機質な黒い眼球があった。

トーヘイは、一八歳の男子の平均的な体格だ。対してテラフォーマーは、巨軀（きょく）である。体重差は倍近いだろう。打撃戦闘において、体重の差は、そのまま攻撃力の差になる。
殺（や）られる。そんな考えが頭をよぎる。
テラフォーマーが腕を振るう。
ヒゲに風を感じたトーヘイの身体（からだ）が、思考とは無関係に、反射的に動く。
一瞬でテラフォーマーの眼球が遠ざかった。トーヘイは意識することなく長い尾を振ってバランスを取り、壁に、四つん這（ば）いで横向きに着地する。
手足の爪が、コンクリート壁のわずかな凹凸に食い込み、身体を支えた。わずかにでも爪が引っかかる壁ならば、垂直にさえ走ることができるネズミならではの動作だ。
「驚いた……いきなり来るなよ、もう。まだ試合開始の合図は——あったか。隔壁、開いたしね……って。壁に貼り付けるのか、僕は。うん、ネズミも悪くないね」
M・O・手術でDNAを移植する生物には、適正が存在する。手術の被験者が好きな生物の特性を選べるわけではないのだ。トーヘイが唯一適合したのが、ドブネズミだった。
ネズミのヒゲは、ただの毛ではない。血の通った、洞毛（どうもう）と呼ばれる感覚器官である。
視力が良いとは言えないネズミが暗闇で平然と活動できるのも、無数の神経で脳と直結した、このヒゲのおかげだ。
よりによってネズミとのハイブリッドになるなんて、とトーヘイは落胆（らくたん）したが、そのネズミの能力のおかげで、テラフォーマーの初撃を避けることができた。



このテラフォーマーは、戦闘訓練用に弱体化されている。だが、今の一撃をまともに受けたら、哺乳類ベースで身体強度が高いとは言えないトーヘイの頭など、スイカ同然に爆ぜていた。

「……じ」

テラフォーマーが、空振りした拳とトーヘイを不思議そうに見比べ、声を漏らした。

「じ、じ」

ふっとテラフォーマーの姿が消える。考えるよりも早くトーヘイは壁の上を走った。

どんっと足の裏に衝撃を感じ、トーヘイは少しバランスを崩した。壁から床に降り、視線を先ほどいた場所に投じる。

テラフォーマーの拳が、コンクリート壁面を丸く陥没させていた。ぱらぱらと破片がこぼれ落ちる。弱体化してあるというのが信じられなくなる威力のパンチだった。

「うわ。喰らったら本気でおしまいだな、僕なんか」

焦りでトーヘイの心拍数が速くなる。テラフォーマーが無表情のままで床を蹴った。数メートルの距離を、一瞬で移動し、再び殴りかかる。

トーヘイにはその動作が、今度は、はっきりと見えた。

のみならず、ヒゲが感じる空気の動きで、テラフォーマーの動きが読める。予測できる。

テラフォーマーが繰り出す拳をやすやすと、トーヘイはかわした。

次々とテラフォーマーが拳を放つが、その全てを、余裕を持って回避する。

――ああ、なるほど。これが、ネズミの生きている世界の、時間の流れか。

ドブネズミのM・O・手術（モザイク・オーガン・オペレーション）を受ける際、得られるかもしれない特性の一つとして、トーヘイは『意識の加速』についての説明を受けた。

心拍数が速く寿命の短い生物と、心拍数が遅く寿命の長い生物では、時間の感じ方が違うという説がある。意識する時間の速さが異なるのだ。

ネズミから見たら、人間などスローモーションで動く、でかいだけののろまな生き物らしい。その意識加速の特性を、トーヘイはM・O・手術で得られたようだ。スローモーションとまではいかなくても、テラフォーマーの攻撃は、決して対処できない速さではなかった。

「ぎ」とどこか苛立ったようにテラフォーマーが鳴いた。

テラフォーマーの大ぶりなフックをくぐり、トーヘイは拳を固めた。

狙うは、テラフォーマーの胸の中心。胸筋を思わせる形の、甲皮の境目。

その部分の奥に、食道下神経節、という部位がある。

昆虫から進化したテラフォーマーの、身体の動作を司っている場所だ。

テラフォーマーは頭を潰しても即死せず、少しの間は行動可能だが、それは、脳ではなく食道下神経節で身体を動かしているからである。

逆に言えば、頭が無事でも食道下神経節を破壊すれば、テラフォーマーは動けなくなり、放っておけば死ぬ。テラフォーマーとて弱点を持つ生物なのだ。完全無欠の存在ではない。

トーヘイは、拳から生えている歯に似た質感の刃を、テラフォーマーの胸の中央に打ち込んだ。この刃は、歯と同じくエナメル質で出来ている。

エナメル質の硬度は、およそ七。生体の中ではトップクラスの硬さを誇り、ガラスや金属にでも傷を付けることが可能だ。

ぴしっとわずかに、黒い甲皮に亀裂が走る。

殴った感触は、これまでに経験したことがないものだった。テラフォーマーの甲皮は、金属のような単純な硬さではなく、硬さの中に柔軟さがあった。

相手は、生物。そうトーヘイは実感した。生物ならば、殺せないことはない。

――いける。効果がある。

もう一発、と左の拳を放とうとしたトーヘイのヒゲが、空気の動きで危機を察した。

トーヘイはその場に、落下するようにしゃがみ込む。頭をテラフォーマーの拳がかすめた。

姿勢が崩れたトーヘイの頭に、ぬっとテラフォーマーが巨大な手を伸ばす。

わしづかみにされたら、おしまいだ。だが、しゃがんでしまっているせいで右にも左にも、後ろにも即座には動けない。

ぶんっと音を立て、トーヘイの腰から伸びたものがテラフォーマーの足首に絡みつく。

トーヘイの背と同じほどの長さの、ドブネズミの尻尾だ。

太さが腕ほどもあるその尻尾で、トーヘイは自分の身体を引っ張った。

トーヘイはテラフォーマーの足下を転がり、距離を取る。即座に立ち上がり、構え直した。

「あ、危なかった。一瞬の油断がほんとうに命取りになるよ、これは……それにしても。今までついてなかったのに、咄嗟に動くものだね、この尻尾。これが本能――かっ？」

呟く途中でテラフォーマーが襲いかかってくる。驚き、トーヘイは真っ直ぐ後ろに下がってしまった。どん、と背中が壁に付いて、はっとする。

横に逃げようとしたトーヘイの行く手を、テラフォーマーが長い腕を伸ばし遮った。

く、と歯がみして逆にステップしても、結果は同じ。壁際から逃げられない。

一瞬、トーヘイは先ほどと同様に尻尾を使うことを考えた。だが、すぐに諦める。

テラフォーマーは、驚異的に学習力が高い。

トーヘイが尻尾を足に絡めようとした瞬間、テラフォーマーは尻尾を摑んで捕えるだろう。

捕まったら最後、手足を引きちぎられる未来しかない。

「ここで、やるしかない！」

トーヘイは、テラフォーマーと打ち合う覚悟を決めた。

左右に逃げられないなら、とにかく攻撃を避けるのみ。

避けて避けて、回避の間に胸中央奥の食道下神経節の破壊を達成する。

できなければ、結果はシンプルだ。おそらくは死ぬ。

この実験室の天井四隅にあるレーザー銃座は、トーヘイを助けるためのものではない。トーヘイが仕留め損なった際に、テラフォーマーを確実に殺すためだけのものだ。

トーヘイは、空手の有段者である。二段で、中学生の時に日本の学生の大会で、上位に進出した。

高校からは飛び級で一気に四年制大学まで卒業してしまったため、中学生以降の実績はないが、宇宙飛行士を目指すトレーニングの一環で、常に修練を積んできた。

――相手を、人間だと思えばいい。ただ、当たれば死ぬ拳と脚を持っているだけの。

「じじ」

優位を疑わないのか、平坦なテラフォーマーの鳴き声に、トーヘイはわずかな優越感がこもっているような気がした。

「調子に乗るなよ、この害虫が。殺れるものなら、殺ってみろよ」

トーヘイはわざと挑発するように告げた。途端、一撃必殺の拳が顔をめがけて飛んでくる。

目で拳を追うまでもなく、空気の流れで拳の軌道が容易くわかった。

視覚に頼らずに済むので、回避行動に集中できる。集中力が意識加速の効果をあげ、テラフォーマーの動きがいっそう、トーヘイには遅く感じられた。

トーヘイは、ぎりぎりで頭を横に振って拳を避けた。

風圧が髪を派手に揺らすのを感じつつ、視界の隅でテラフォーマーが空振りした拳を捕えたまま、右の拳を黒い胸板に突き込む。

がつっと拳から生えた歯ならぬ刃が甲皮を削り、亀裂が、ほんの少しだけ広がる。

テラフォーマーには痛覚がない。だからトーヘイの攻撃など意にも介さず、再び拳を放つ。

その拳をトーヘイはまたぎりぎりのタイミングで避け、前のめりになるテラフォーマーの勢いまで利用して、数ミリも違わないポイントに左の拳を打ち込んだ。

ぴき、と亀裂の数が増える。だがまだ、拳の刃で貫けるほどではない。

――焦るな、僕。ただ正確に、作業をこなせ。

一度でも避け損なったら致命傷になるテラフォーマーのパンチを紙一重でかわしつつ、トーヘイは繰り返し、胸の甲皮の継ぎ目に打撃を入れ続けた。

三発、四発、五発、六発。七発目で、ぱらっと甲皮が破片となって剝がれ落ちる。

その隙間、ほんの五センチほど。トーヘイの拳の刃が、かろうじてすり抜けられる広さだ。

そこに刃を突き立てれば、亀裂の奥にあるテラフォーマーの弱点、食道下神経節を貫ける。

――ここだ！

待ちに待ったチャンスに、トーヘイの気は急いた。

利き腕の右拳に力がこもり、突きを放つ動作が、わずかに大きくなる。

その隙をテラフォーマーが見逃さなかった。

パンチとは異なる空気の動きにトーヘイが気付いた瞬間、テラフォーマーが蹴りのモーションに入った。

胴を狙った回し蹴りだ。まともに喰らえば、M・O・手術で強化されているとはいえ、人間の身体など真っ二つにされる。

下がって回避は、背後が壁だから不可能だ。横に跳んで逃げるのは間に合わない。

腕でガードしようが、そんなものは意味をなさない。腕などへし折られるだけだ。

トーヘイは咄嗟に、蹴りから逃げるように横に跳びながら片足を上げた。

裸足の足の裏で、テラフォーマーの蹴り脚に乗る。

蹴りの勢いを無理に吸収しようとせず、トーヘイは蹴りの威力に身を任せた。

一瞬でテラフォーマーの姿が遠ざかる。相手の力を利用しての回避に成功したが、安心する暇はない。このままだと壁に叩きつけられる。そのタイミングを狙われたら、それこそ今度は避けられない。

「冗談じゃない！」

トーヘイはくるっと宙で身を翻し、両手両足、さらに尻尾を使って壁に着地した。

どんっとテラフォーマーが床を蹴り、壁ごとトーヘイを粉砕しそうな勢いで拳を振り上げて迫る。

壁から降りて体勢を整える暇はない。トーヘイは、このまま迎撃する覚悟を決めた。

両手両足で壁を突き飛ばし、跳ぶ。

トーヘイを叩き落とすつもりか、テラフォーマーが構えを変えた。両手を組み合わせ、振り上げる。

「そうはいかない！」

トーヘイは、ぶんっと尻尾を振り下ろし、尻尾で床を叩いた。反動で、身体が跳ね上がる。

鼻先、ほんの数センチをハンマーのような勢いでテラフォーマーの拳がかすめた。

がっとテラフォーマーの拳がコンクリートを砕く。

そのすぐ前にトーヘイは着地し、右拳の刃をテラフォーマーの胸の亀裂に突き立てた。

トーヘイの拳の刃は短い。テラフォーマーの分厚い身体の奥にある、食道下神経節までは届

かない――

「伸びろおッ!!」

気合いに応じて、拳の刃が伸びた。生涯伸び続けるネズミの門歯の特性の応用だ。

トーヘイは、拳の先でぶつっと何かが千切れる感触を覚えた。

途端、がくりとテラフォーマーの全身から力が抜け、その場に崩れ落ちる。

「じ、じじじ、ぎ、じ」

何が起きたかわからない、というようにテラフォーマーが鳴いた。出せるのは声だけで、床に伏したまま身動きできないらしい。

「か、勝てた……はぁぁ……」

トーヘイは大きく息を吐き、脱力した。

闘うという意識が消えたため、変身薬の効果が失われる。多糖類アミロースの甲皮がぱらぱらと剝がれ、元の肌に戻る。顔のヒゲも抜け落ち、尻尾は見る間に縮んで消えた。

『よくやったわ、おめでとう。合格よ、トーヘイ。少し後ろに下がりなさい』

天井の隅から、ジャニスの声が聞こえた。

「あ、はい」戦闘を監視されていることをたった今まで忘れていたトーヘイは、言われるままにテラフォーマーから離れた。

直後。天井の四隅から、赤いレーザー光がテラフォーマーに照射された。

超高熱のレーザーが、テラフォーマーの身体を焼き切っていく。タンパク質の焦げる芳ばし

い臭いが立ち上る。

「ぎぃッ！　ぎ、ぎ、ぎぎぎッ！」

痛覚がなくてもレーザーの熱は感じるのか、テラフォーマーが悲鳴を漏らした。

その間もレーザーが、テラフォーマーの身体をバラバラに焼き切り続ける。

「ぎ」テラフォーマーの頭部が、左右に真っ二つになった。

標本のような脳の断面を目にし、思わずトーヘイは顔を背けた。

残酷さなら、人間もこのゴキブリも変わらないよな。そんなことをふと思う。

『トーヘイ。さっそくだけれど仕事があるわ。私のオフィスまですぐに来ること』

いいわね、と念を押すと、トーヘイの返事も待たずにジャニスの声は途絶えた。

「……仕事？　僕に？　いきなり？」

テラフォーマーを倒せたことで、トーヘイはU―NASAを追い出されずに済んだばかりだ。まだ配属先さえ決まっていない。

とはいえ、ここで仕事を断れば、U―NASAでの居場所を失うことは想像できた。

きょとんとした顔でトーヘイは首を傾げた。同時に、がこんと重い音を立て、壁の一角が開いた。そこからさっそく白衣姿の男たちが部屋に入ってきた。U―NASAの科学者たちだ。

トーヘイには目もくれず、科学者たちはテラフォーマーの死骸に群がる。

「おお、見事にばらばらだ」「免疫寛容臓以外に用はないんだけどな」「他は標本にするだけだ」「うむ、この頭蓋の断面はいいな。脳幹で綺麗に切れている」

科学者たちは、持ってきた容器に慣れた手つきでテラフォーマーの組織を回収し始めた。
その中の一人が、トーヘイを横目で見た。
「君。用がないなら、出て行ってくれないかね。作業の邪魔だよ」
「あ、すみません。失礼しました」
トーヘイは深くお辞儀をすると、早足で外に向かった。入り口で靴を履き、廊下に出る。
「……何だかすごいな、科学者って人種は。完全に、テラフォーマーをモノとしか見てない感じだ」
そんな感想を呟くと、トーヘイはジャニスのオフィスに向かった。

「……あれ。どっちだっけ」
右を見ても左を見ても似た廊下と壁が続いている場所で、トーヘイは立ち止まった。
「……また、迷った。M・O・手術で方向音痴も治ればよかったのに」
トーヘイは自他共に認める方向音痴で、外だろうが建物の中だろうが、すぐに迷う。
迷い慣れているから、誰かに助けを求めることにも慣れている。
誰かいないかと困惑顔できょろきょろしていると、背後のドアが開いた。
ちょうどいい、道を聞こうとトーヘイは振り返った。
灰色の髪に蒼い瞳、長い睫に白い肌。すっと通った鼻筋に、細めの顎。

歳はトーヘイと同じくらいだろうか、まるで人形のように顔立ちが整った美少女だ。
トーヘイと同じ訓練用コスチューム姿で、髪はショートカット。腰は女性らしく細く、胸と尻は均整が取れつつボリュームがある。
もう少し背があればモデルでもできるんじゃないか、とトーヘイが思ってしまうようなその美少女が、不快そうに、眉間にくっきりと皺を寄せた。
「あ？　何だ、テメェ。いきなりメンチなんぞ切りやがって。喧嘩でも売ってんのか？」
「え。あ。いや。そんな気は、ぜんっぜんないんだけど」
「じゃあとっととそこどけよ。あたしは急いでんだ」
「あ、ごめん」
トーヘイは頭を下げて少女に道を譲った。ふん、と少女が嘲るように鼻で笑う。
「テメェ、日本人か？」
「そうだけど。それが何か？」
「すぐにへこへこ謝るってのはほんとなんだな、あの島国の猿っ」
ぷ、と笑いをつけたして、少女はくるっとトーヘイに背を向けた。その言葉と態度が、トーヘイはかちんと来た。
「おい、ちょっと待てよ」
少女の肩を背後から摑む。瞬間、少女が素早く身を翻した。
直後、トーヘイは天井を見た。顎から頭に衝撃が突き抜け、アッパーを食らったと気付く。

少女の肩から手を放すと、しびれる顎を片手で押さえ、トーヘイは顔を前に戻した。
「いきなり殴るだなんて、酷いじゃないか！」
「テメェこそいきなり肩なんか摑むんじゃねーよ。レディに対して失礼だろ」
「誰がレディだよ、誰……ぶっ？」
ぱんっとこぎみよい音がして、トーヘイの顔が、弾けるように横を向く。テラフォーマーのパンチよりも数倍速いとしか思えない左ジャブを、少女が無造作に放ったのだ。
「島国の猿は礼儀も知らないみたいだな。ま、猿だし仕方ねーか。じゃ、あたしの邪魔をするなよ？　次は手加減してやんねーぞ」
とんっとトーヘイの肩を片手で突き飛ばし、少女が身を翻す。また殴られてはかなわないと、今度は肩を摑まず、その背にトーヘイは声をかけた。
「待てってば。日本人を馬鹿にした上に二発も殴っておいて、謝罪の一つもないのかい」
少女が、いっそう不機嫌な顔で振り返る。
「ああ？　謝るよーなことしてねーっての。あたしはジャニスに呼ばれて急いでんだからよ。これ以上邪魔するってんなら、そこの中のゴキブリみたいにしてやるぜ？」
少女が親指で、出てきた部屋を指さした。そのタイミングで、廊下の先から白衣の科学者たちが複数、やってきた。
科学者たちはトーヘイと少女に目もくれず、室内に入っていく。
「いやあ、見事に頭がぐちゃぐちゃだ」「ふむ、目に付く傷は他にも多いな」「ダメージの受け



方の調べがいはありそうだねぇ」
そんな科学者たちの声が廊下にまで聞こえてきた。
ここでトーヘイは、少女の首筋に自分と同じ変身薬のシール剤が貼ってあることに気がついた。シール剤タイプの変身薬は、哺乳類型M・O・手術被験者専用である。
少女がトーヘイと同じくM・O・手術を受けていて、テラフォーマーを相手に戦闘訓練をしてきたことは、間違いなさそうだ。
「その。さっき、ジャニスさんの名前を口にしたよね」
「したけど。それが何だってんだよ」
「僕も、M・O・手術後の管理担当が、ジャニスさんなんだ。それで、ジャニスさんに呼ばれてるんだけど……その。迷っちゃって……はは」
ふう、と少女が呆れたように息をつく。
「……オーケイ、わかった。おまえがトンマでトンチキでノロマな間抜けだってことは了解したよ。あたしにジャニスのところまで連れてけってんだな、この迷子野郎？」
酷い言われようだと思うも、トーヘイは反論しなかった。
文句を付けたら、絶対にジャニスのところに連れて行ってもらえない気がしたからだ。
「……お世話になるよ。僕は、トーヘイ・タチバナ。アネックス一号のクルーになり損なった仮契約職員だよ」
少女が回れ右をしながら返す。

「あたしはエリザベス・ルーニー。死に損ない……いや、同じくクルーのなり損ないさ。リジーでいい。んじゃ行くぞ」
死に損ない、という言葉が気になったが、背を向ける際にちらっと見た少女――リジーの眼が、ぞくりとするほど冷たかったため、トーヘイは疑問を口に出せなかった。
無言で先を行くリジーを追って、廊下を進む。
幾度か階段を登り降りし、さらに幾度か廊下の角を曲がったところで、リジーが立ち止まる。
「どうかした？」とトーヘイはリジーの背に問うた。
「ああもうどうしてこの建物、どこもかしこも同じような造りなんだよ」
トーヘイの問いには答えず、リジーが頭をかきながらぶつぶつとこぼした。
「……もしかして。迷った？」
振り向きざまに、リジーが早口でまくしたてる。
「ち、ちげーよ、バッカ。誰が迷うもんか。ちょっとどこにジャニスの部屋があるのか、ど忘れしただけだっての」
「……いや。それを迷ったって言うんじゃ」
「ああ？　文句あるなら一人で行けよっ」
リジーがトーヘイの胸元を摑む。華奢な見た目に反して、けっこうな力でトーヘイは引っ張られた。
「お、落ち着こう。さっき殴られたことは、もう忘れたから」

「忘れたって言ってるのは、忘れてねえ証拠だろ。しつこい野郎だな、おい。今度こそ忘れるまで頭をぶん殴ってやろうか？」

先ほどのリジーの動きをトーヘイは思い出す。

最初に受けたアッパー、次のジャブ。間違いなくボクシングの技だ。

リジーの名に、今さら聞き覚えがあるような気がして、トーヘイは胸元を摑まれたまま、首を傾げた。

「……あれ。リジー……エリザベス・ルーニー……どこかで……」

「んだよ、あたしの名前がどーかしたのかよ」

「ああ、そうだ！　思い出した、エリザベス・ルーニーって、あのエリザベス・ルーニーなのか、ハイスクール女子ボクシング、バンタム級チャンプの!?　次のオリンピックの、ゴールドメダリスト候補って言われてた!?」

数年前。トーヘイが飛び級で高校のカリキュラムを終えて大学に進んだ頃、同じ歳のアマチュア女子ボクシング選手が話題になった。

高校一年生で州大会から全国大会まで全試合KOの無敗で勝ち進み、一度も負けることなく、バンタム級を制した、美少女ボクサー。

一時期、かなりマスコミが騒いだのでトーヘイの記憶にも名前と顔が残っていた。

数年前よりは成長している上に、ものすごく不機嫌そうな顔をしているが、リジーは間違いなく、トーヘイの記憶にあるエリザベス・ルーニーだった。

ち、と舌打ちしてリジーがトーヘイを放した。トーヘイは新たな疑問に首を捻る。

「――って、オリンピックって来年だったよな？　強化選手のはずの君が、何で、こんなところにいるんだ？」

今年は二六一九年。来年が、オリンピックイヤーである。本来ならば、オリンピック参加の選手が、こんなところでM・O・手術を受けているはずがない。

「ボクシングなんざとっくに辞めたっての。あんた、知識が古いな。二年前に行って脳みそ洗ってきやがれ、このファッ○ンイエローモンキーが」

「二年前……何かあったのか？　その頃僕、大学の論文作成で忙しくて、ニュースとか、ほとんどチェックしなかったから」

ちっ、と先ほどより大きくリジーが舌打ちする。

「知らないならそのまま知らないでいやがれ。てめえ、マジ不愉快だ」

ぎろりと大きな目でリジーがトーヘイを睨む。トーヘイは何が何だか、わからない。

「……僕に何か落ち度があったなら、謝るけど。何を謝っていいかわからないと、謝りようがない」

「そんなら死んで詫びとけよ。それであたしは、すっきりするさ」

無責任すぎるリジーの言葉に、トーヘイはさすがに苛立った。

「死ねって。初対面の人間によくも言えるな。さすがに聞き捨てならない」

「あん？　聞き捨てならねえってんならどうするんだ、童貞野郎」

「ちぇ、童貞(チェリー)っ？」

予想もしていなかった言葉に、トーヘイは面食らった。返す言葉もなく、焦る。

何をどう言えばいいのかわからずあたふたしていると、後ろから声をかけられた。

「なんだなんだ、こんなところで痴話喧嘩(ちわげんか)か？　仲いいな」

男の声だ。リジーの視線がトーヘイの顔よりも上を向く。後ろから来た男は大柄らしい。

トーヘイは振り返った。見覚えのある顔だ。思わず、相手の名前をフルネームで口にする。

「小町小吉(こまちしょうきち)――ア、アネックス一号艦長のっ？」

二五九年、バグズ計画で火星に行ったバグズ二号クルーの数少ない生存者で、来年二六二〇年に火星に赴(おもむ)く宇宙艦アネックス一号の艦長にして、火星探索チームの総隊長である。

小町小吉は、二〇年前、バグズ手術というＭ・Ｏ・手術(モザック・オーガン・オペレーション)の技術ベースとなった昆虫のＤＮＡを後天的に組み込む手術を受けており、オオスズメバチの特性を持っている。

このＵ―ＮＡＳＡにいる人間で、小吉を知らないものはいない。

小吉が、無骨な顔に人の好さを感じさせる笑みを浮かべた。

「おいおい、そんな人を有名人みたいに言うなよな」

「有名人ですよ！　だって、世界で唯一、人類で二度火星の土を踏むことになる宇宙飛行士じゃないですか、小町艦長は！」

宇宙飛行士にあこがれのあるトーヘイは、興奮して声を張った。

小吉が照れくさそうに苦笑する。

「そりゃまあ艦長だけどよ。操船は俺がするわけじゃねえし、宇宙飛行士っつーのとは、ちょっと違うからな。でもまあ、そうキラキラした目で見られるのは、悪い気しねえな――って。おまえの首のシール、変身薬だよな？　おまえもアネックスクルーになるんじゃないのか？」

トーヘイの顔から喜びの色が消え、苦笑が浮かぶ。

「僕は火星には、その。行けないんです」

「何でだ？」

「Ｍ．Ｏ．手術、一応は成功したんですが、適合率が低くて。常に免疫抑制剤(めんえきよくせいざい)を大量に服用する必要があって、アネックス一号クルーの採用基準を満たせなかったんです」

あー、と小吉が思い出したような顔で声を漏(も)らした。

「手術の不完全適合者って奴か。そか、それは残念だったな……おまえの分まで、火星で頑張ってきてやるよ。帰ってきたら、土産話(みやげばなし)でもしてやるさ」

小吉の言葉はただの社交辞令かもしれないが、トーヘイには嬉しかった。

「ありがとうございます。同じ日本人として、応援してますから」

お、と小吉の表情が明るくなる。

「なんだおまえ、日系人じゃなくて日本人なのかっ。そっか、そんじゃ仲良くしないとな！　出身どこだよ？」

小吉がトーヘイの肩を片手でバンバンと叩いた。結構痛いが、トーヘイは笑顔になる。

「僕は静岡です。ハイスクールからは飛び級でアメリカに来ましたけど、中学までは、空手も

やってました！」
「おお、マジか！　空手なら俺、六段だぜ！　そっかそっか、俺は――」
「あのさ。あんたら、盛り上がってるとこ悪いんだけどよ」
むすっとした顔でリジーが口を挟む。
「あたしら、ジャニスって奴のオフィスに急がないといけねーんだよ。オッサン、ジャニスのオフィスがどこか、知らねえか？」
横柄なリジーの口調に、トーヘイは振り返った。
「リジー、小町艦長に乱暴な口の利き方は」
「知るかよ、別にあたしの上司でもなんでもねえし。オッサン、どうなんだ？　ジャニス・リーっつーM．O．手術哺乳類研究チームの女のオフィス、知ってるのか、知らねえのか」
ふむ、と小吉が思案顔になる。
「ジャニス・リーのオフィスか。確か、こっちだ。案内してやるから、ついてきな」
小吉が踵を返す。その大きな背に、トーヘイは訴える。
「そんな、小町艦長に道案内させるなんてできませんよっ」
「いいって、いいって。俺のほうは急ぎの用じゃねえしな」
「ですが」と言い募ろうとしたトーヘイの脚を、後ろからリジーが蹴る。
「いいからとっとと歩けよ。案内してくれるってんだ、さっさと行ったほうがオッサンにも迷惑にならねえだろ」

もっともなリジーの言葉にトーヘイは反論できず、納得がいかないまま、リジーと肩を並べて小吉の後ろを歩き始めた。
しばし後。幾度か階段を登り降りし、角を数回曲がったところで、小吉が立ち止まる。
「ついたんですか？」とトーヘイ。
「……迷った」と小吉が苦笑して振り返った。
「頼りにならねえ艦長さんだな、おい」とリジー。
あたふたと小吉が、ウエアのポケットから掌サイズの携帯端末を取り出した。
「ちょ、ちょっと待ってろ。端末使えばすぐに現在位置とルートぐらいわかるって」
「ったく、端末持ってるならさっさと使えっての。こっちは戦闘訓練直後で、ソイツはロッカーの中なんだよ」
支給されている情報端末を、トーヘイもリジーも今は所持していない。持っていればそもそも、道に迷うことはなかった。
持っていても使わないで迷う人がいるのか、とトーヘイには小吉の姿が新鮮に見えた。
小吉が太い指で、小さい端末の画面をタッチ操作する。
「アイコンがやたら小さくて使いにくいんだよな、コイツ。ええと、確かここをこう」
小吉の手つきは、あまり使い慣れていなさそうだ。
ダメだこりゃ、とリジーが肩をすくめる。
「こんなところで何をしてるんだ、艦長？」

女の声が聞こえ、トーヘイもリジーも、小吉も同時に声がしたほうを向いた。
理知的な顔立ちに眼鏡をかけた、金髪碧眼の女が立っていた。
その顔も、トーヘイは知っていた。
ミッシェル・K・デイヴス。アネックス一号の幹部クルーで、副長を任されている。
トーヘイは、ミッシェルとは面識がまったくない。彼女の話はジャニスから少し聞いただけだが、ミッシェルは、バグズ二号の艦長だった父親からの遺伝で生まれつき免疫寛容臓と弾丸アリの特性を有しているらしい。
嘘か真か知らないが、怒ると強烈に怖いという噂も聞いている。
ミッシェルを見て、小吉の表情がぱっと明るくなった。
「お、ミッシェル。いいところで会った！　おまえ。ジャニス・リーって職員のオフィスの場所、知らねえか？」
「は？　何を言ってるんだ？」
ミッシェルが、きょとんとした。小吉が再び困り顔になる。
「だからさ。ジャニスって奴のオフィスの場所だよ。この端末、使いにくくてさ」
「……何の冗談なのか知らないが。そこだろ」
ん、とミッシェルがトーヘイたちの横を指さした。
そこにドアが有り、ネームプレートには確かにジャニスの名があった。
小吉がぽかんと口を開ける。はあ、とミッシェルがため息をつく。

「しっかりしてくれ、艦長。あっちでも迷子になられたら、かなわないぞ」
「あは。あはは。い、嫌だな、副長。迷子なわけがあるか、慣れた施設なんだから。冗談だ、冗談！」
照れ隠しか、バンバンと小吉がトーヘイの背中を平手で叩いた。
「じゃ、またな――って、そうだった。名前、聞いてなかったな。なんて名だ？」
小吉が、トーヘイに握手を求めるよう手を差し出す。その手をトーヘイは握り返して答える。
「トーヘイ・タチバナ――いえ、立花東平です」
「そっか。じゃ、こっちの流儀でトーヘイって呼ばせてもらうかな、一応。お前の端末に、俺のほうから連絡先を送っておくよ。何かあったら気楽に連絡してくれ、同じ日本人だしな」
気さくに小吉が言った。トーヘイは握手をした手を放すと、深く頭を下げる。
「きょ、恐縮です、小町艦長！　今日はお世話になりました！」
「いいってことよ。俺も迷っただけだしな」
「……やっぱり迷ってたのか」とミッシェル。
「ったく大丈夫か、この艦長」とリジー。
リジーとミッシェルは、ちらっとだけ視線を合わせると、互いに興味がなさそうに目を逸らした。それをトーヘイは、頭を上げる際に横目で見て、思う。
――どことなく似てる気がしなくもないな、この二人。何となく怖そうだし。
リジーの前で、思ったことをそのまま口に出さない程度には、この短時間の付き合いで、ト

ーヘイは学んでいた。

じゃあな、と片手を挙げた小吉が、ミッシェルと並んで立ち去っていく。

「ミッシェルは、何でこんなところにいたんだ？」

「部下のM（モザイク）・O（オーガン）・手術（オペレーション）について、ちょっとな」

そんな会話をしながら、小吉とミッシェルは廊下（ろうか）の角を曲がって見えなくなった。

二人を見送ったトーヘイの背中を、どんっとリジーが拳で強く叩く。

「ぼけっとしてんじゃねーよ。とっとと入るぞ、ここの部屋」

「……ああ、わかった。でもさ、背中を殴（なぐ）ることはないんじゃないか？」

「オッサンにバンバン叩かれて嬉しそうな顔してたからな、そういう趣味があるんじゃねーかと思ったんだよ」

「ないって、そんな趣味」

トーヘイは、ぼそっと一言だけ反論して意識を仕事に戻すとジャニスのオフィスのドアに向かった。

これから何が自分を待っているのか、まったく考えずに。

TERRAFORMARS（テラフォーマーズ）
THE OUTER MISSION スカベンジャーズ
II 卵泥棒

「あなたたち二人には、これからコンビを組んでもらうわ」
ジャニスのオフィス。窓際のデスク横に立っている、胸元が大きく開いたワンピースの上に白衣を羽織った長い赤毛が印象的な女――
ジャニス・リーが、トーヘイとリジーがオフィスに入るなり、来室が遅くなったことを咎めもせずに、そう言った。
唐突な辞令だ。トーヘイより先にリジーが口を開く。
「あ？　コイツと組むのかよ？　おいおい、冗談はよしてくれ、ジャニスさん。何をさせたいか知らねえけど、コイツと組むくらいなら、あたし一人のほうがよっぽど働けると思うぜ？」
は、と馬鹿にしたようにリジーが短く笑う。トーヘイはむっとした顔をした。
「僕だって、こんな人と組みたいとは思いません。だいたい――」
「あ？　あたしの何が不満だってんだ、この野郎」
リジーがトーヘイを横目で睨んだ。その目をまっすぐとトーヘイは見据え返す。
「そういう横柄な態度だよ。初対面の相手に、よくもそんな偉そうに振る舞えるものだね」
「ああ？　何だか知らねえが妙に旨そうな匂いをぷんぷんとさせてる奴が、よく言うな」
旨そう。トーヘイには、一瞬、リジーの瞳孔が大きく丸く開いたように見えた。
その眼を見た瞬間、えも言われぬ悪寒が背筋を駆け抜け、ぶるっとトーヘイは身震いした。
喰われる。
そんなことを何故か考えてしまい、一歩、後に下がった。

「へ、びびってやんの。ほらよ、ジャニスさん。この通りだ、こんな奴と組んだって――」
リジーの言葉の途中で、ジャニスが告げる。
「決定事項だから拒否権なんてないわよ、あなたたちに。組む相手が役に立つかどうかは関係ないの。これから変身薬を所持して施設の外に出るあなたたちには、万一そのまま逃走したりしないよう、互いに互いを監視させる必要がある。だから二人で組ませる。それだけよ」
言いつつ、ジャニスが胸の下で腕を組んだ。白衣のせいでわかりづらかった豊かな胸が強調されるが、トーヘイはそんなことに興味を持てなかった。
トーヘイは真顔に戻ってジャニスに問う。
「変身薬を所持して、ですか？　まさか、テラフォーマーが施設の外に逃げ出したんじゃ」
「違うわ。最悪の場合、そうなるかもしれないけれど」
と、ジャニス。リジーが訝しむように眉を寄せる。
「回りくどい言い方するなよな。何がどうしたってんだよ」
そうね、とジャニスが仕切り直すように小さく呟いた。数秒の沈黙の後、苛立ったような表情になって告げる。
「盗み出した人間がいるのよ。あの、ゴキブリの――卵を」
トーヘイは絶句した。事件は重大どころの話ではない。
知識としてしか知らないが、テラフォーマーの生態は、祖先であるゴキブリに似通ったところが多く、繁殖は卵生だ。

テラフォーマーは、複数の卵が入った卵鞘というものを産む。一つの卵鞘から孵化するテラフォーマーは、最低でも二匹。多ければ五匹を超えることもあるらしい。

卵鞘が外で孵化すれば、複数のテラフォーマーが、街に放たれる。

一般人に、あのゴキブリ人間に抗う術などあるはずもなく、どれほどの被害者が出るか、想像したくもないほどだ。

リジーは事の重大さをわかっていないのか、平然としている。

「オーケイ、わかった。その卵とやらを取り返してくればいいんだな？」

トーヘイは軽くうろたえながら、リジーに訊ねる。

「リ、リジー。簡単に言うけど、それがどれくらい重大か、わかってるのかい？」

「は。ほんとおまえ、チキンだな。重大だとか考える前によ、そんなもん取り返さないとヤバいに決まってるじゃねーか。変身薬を持って外に行けってんだから、孵化する可能性もあるし、その場合はゴキブリを狩るしかねえし？　ベストは孵化する前に、盗んだ奴をとっ捕まえて卵を取り返すことに決まってるだろ？」

すらすらと淀みなくリジーが言った。トーヘイはぱちくりと瞬きをする。

「……バカじゃなかったのか――ぶっ？」

ぱんっと鋭いジャブをトーヘイは鼻に受けた。

手首のスナップが利いた、いい一発だ。トーヘイには、動作がほとんど見えなかった。

「てめえこそ、初対面の女をバカだと思うんじゃねーよ、失礼にもほどがあるぜ」

「す、すみまへん」

トーヘイは鼻を押さえて謝った。リジーは手加減してくれたようで、鼻はじんじんしびれるだけで、鼻血は出なかった。トーヘイは改めてジャニスに目を向ける。

「盗まれた卵鞘ですが。すぐに孵化する危険性があるものなんですか？」

「そこは未知数ね。持ち出されたのは、液体窒素で冷凍保存されていたものなの。この施設の設備を使えば確実に孵化させられるけれど、自然解凍で孵化するかどうかは、わからないわ。仮に孵化すると想定した場合、十二時間経てば、孵化の可能性が高くなる」

「……十二時間。それまでに卵鞘を取り戻さないと、最悪の場合――」

「そう。奴らが街に解き放たれることになる。それは、絶対に避けなきゃいけないの」

ジャニスの表情は、深刻そのものだった。一方で、リジーは平然としている。

「でもよ。十二時間は安全だってことだろ？　余裕だろ、余裕」

トーヘイは血相を変えて声を荒らげる。

「余裕なものか！　こうしている間にも、盗んだ犯人はどこまで逃走しているかわかったもんじゃないんだ！」

「ワシントンからは出てねえんじゃねえのか？　なあ、ジャニスさん。卵が盗まれたってわかった時点で、警察には連絡してあるんだろ？」

リジーの問いに、ジャニスが頷く。

「もちろんよ。テラフォーマーの存在は、警察だと上層部しか知らないけれど、バイオテロに

使用できる危険物質が盗難されたという形で、警察には動いてもらっているわ。すでに、主要な道路や駅、空港、全てで警戒態勢が敷かれている。街頭の監視カメラ網をすり抜けてこの都市から脱出するのは、困難なはずよ」

十二時間。時間に余裕があるとは言えない。だがトーヘイには、警察の協力さえあれば犯人を見つけ出すことはできそうに思えた。オフィスの壁にある時計を、ちらりと見る。

今、ちょうど昼の零時だ。日付が変わる頃まで、時間には猶予がある。

トーヘイは気を取り直して、ジャニスに訊ねる。

「監視カメラで見つけられるってことは。盗んだ人が誰かは、わかっているんですよね？」

「コイツよ」

ジャニスが、デスク上の薄型モニタの向きをトーヘイたちに見えるように回すと、画面をタッチ操作した。ぱっと男の顔写真が表示される。

褐色の髪の白人男性だ。顔写真の横に体格等の身体データも表示されている。白人男性としては平均的な体格だ。顔立ちも、それほど特徴がない。

「デール・ギブソン、二六歳。アネックス計画の志願者だけれど、M：●オーガン　O：●オペレーション　手術はまだ受けてないわ。技術系職員の誰かが手引きして、この男に、卵鞘を一つ盗ませたみたいなの」

「みたい、ってのは何だよ？」とリジー。

「誰が卵鞘をコイツに盗ませたのか、まだわからない。ただ、卵鞘がなくなり、この男が忽然とこの施設から姿を消した、という事実があるだけよ」

と、ジャニス。憂鬱そうに髪を片手でかき上げてから、続ける。

「これから施設に警察を入れて捜査させるけれど、テラフォーマーについて、捜査官に知られるわけにはいかない。だから施設内の捜査は限定的なものになるし、施設内の捜査ですぐに事実が明らかになる可能性は低いわね」

トーヘイとリジーは、同時にまったく異なる意見を口にする。

「それじゃあ、この人が盗んだとは限らないじゃないですか」

「決まりだな。そんなの、コイツが盗んだにきまってるだろ」

意見が対立し、トーヘイとリジーは視線を交えた。

「決めつけるのはよくないと思うけど」

「おめでたい奴だな、性善説なんか信じてやがんのか？」

む、とトーヘイは黙り込んだ。リジーも口を閉ざす。

「意見は聞いてない。あなたたちがすべきなのは、万一に備えて変身薬を所持し、警察と協力して、デール・ギブソンを追うこと。事実は、デールを確保すれば自動的に明らかになるわ」

とジャニス。デールの有罪無罪をここで論議するよりも、ジャニスの言う通りにしたほうが事実を知るには早いはずだ。

「デールの発見は、それほど難しくないはずよ。持ち出された卵鞘は比較的小型のものだけど、それでも、大きめのスーツケースなどで持ち歩く必要があるから、目立つわ」

テラフォーマーの卵鞘はラグビーボールのような楕円形で、平均的に、大人の股下近くまで

の大きさがある。それだけの大きさのものを持ち運ぶのだ。目立たないわけがない。
顔が割れていて、大きな荷物を持っている。確かにデールの発見は容易そうだ。
「わかりました、任務にあたります」
と、トーヘイ。リジーが頷きもせずに告げる。
「どうせ拒否権はねえんだろ。いいさ、やってやる」
「話が早くて助かるわ。これが変身薬と、念のための装備よ」
ジャニスがデスクの抽斗を開けると、タブレットケースを二つ取り出し、デスクに置いた。
変身薬のようだ。
「変身薬は、二回分。使わないことを祈っているわ。それから、これが武器」
さらに、ごとっと重い音を立てさせて、オートマチックタイプの拳銃を二丁と携帯用ホルスター、さらに予備の弾倉を二つ、デスクの上に置く。
古くさい、油の臭いがしそうな拳銃だ。トーヘイは、その拳銃を見て問う。
「……その拳銃は？」
「二〇世紀にファブリックナショナル社が開発した、ファイブセブンと呼ばれる拳銃の、そのレプリカよ。マガジン一つ当たりの弾数は二〇発。予備弾倉は、一人一つずつ。見た目は古くさいけれど、最新の素材でできているわ」
「いえ、そういうことじゃなくて。その拳銃を、僕たちに持って行け、ということですか？
射撃訓練は一応受けましたけど、拳銃程度じゃ、万一、卵鞘からテラフォーマーが孵化した場

合、あまり役に立ちませんよね」
テラフォーマーの頑丈さを、トーヘイは今日、身を以て学んだ。
哺乳類型M・O・手術を受けたトーヘイは、昆虫型などと違い、戦闘力はそれほど高くない。だが、それでも当たり前の人間よりははるかに筋力があり、並の拳銃よりも、トーヘイのパンチのほうが、ずっと威力がある。
エナメル質の刃を備えた拳を何発も打ち込んでようやく、テラフォーマーの胸部の殻に、トーヘイは穴を開けることができた。
拳銃の弾丸など、あの殻にはやすやすと弾かれるとしか思えない。
「変身しないあたしのパンチのほうが、そんな拳銃の弾より強いぜ？」
と、リジー。ジャニスは表情を変えることなく、淡々と返す。
「上から試せと言われているのよ。別に私が選んだわけじゃないわ。一応までにスペックを説明すると、ファイブセブンレプリカは、弾丸の貫通力に優れた拳銃で、軍用ライフルに似た小口径の専用高速弾を使うの。この弾丸は、至近距離ならテラフォーマーの甲皮も撃ち抜くわ。的確に奴らの急所――食道下神経節を狙えれば、一発で無力化できる」
「それがほんとうなら、使える武器だと思いますが。実証試験はされているんですか？」
「さあ？　そこまでは知らないわ」
無責任にジャニスは言い切った。ふんとリジーが鼻を鳴らす。
「持ってきゃ上も文句言わねえだろ。だいたい、卵はゴキブリが孵る前に取り戻すのがベター

なんだろ？　なら、そんな銃だって使うかどうか、ここで考えても意味ねえよな」
リジーが冷静に正論を口にした。つい、トーヘイは素直な感想を言ってしまう。
「……やっぱりバカじゃなかったのか……んがッ？」
パパン、と肉を打つ音が響く。リジーのジャブが、トーヘイの左右の頬を連発で打ったのだ。
「ほんっと失礼な奴だな。テメェ、そんなにあたしがバカに見えるってか？　テメェがどれだけ賢いか知らねえけどよ」
ジャニスが、ふぅとため息をつく。
「リジー、その言葉遣いじゃ頭が悪く思われても仕方がないわよ。それに、彼。頭がいいかどうかはともかく、勉強はとてもできるほうだから。あなたと歳は同じだけど、もう大学のカリキュラムも終えているわ」
「ふーん。勉強が好きなのか。変わった奴だな」
リジーが妙なものを見るような目を、トーヘイに向けた。
トーヘイは打たれた左右の頬をさすりながら、軽く口を尖らせる。
「別に、勉強が好きだったわけじゃない。ただ、早く宇宙飛行士になるには、航空宇宙工学の学士課程くらい、履修するべきだっただけで」
「宇宙飛行士？　そんなものになりたかったのか、テメェ？」
「……君には関係ない話だよ。そんなことより」
改めて、トーヘイはジャニスに視線を向けた。

「事態は一刻を争うんですよね、ジャニスさん。僕たちはこれからどうすればいいんです？」
「もうすぐ正門の前に、ハロルドというワシントン首都警察の刑事が、あなたたちを迎えに来るわ。もう警察は捜査を始めているから、ハロルドに同行して。外に出る時には、その変身薬と拳銃を忘れずに。服装は、私服でお願い」
「了解しました」とトーヘイ。「オーケイ」とリジー。
ジャニスが、唇の端をわずかに釣り上げて、笑みを見せた。
「無事に任務を遂行すること、祈ってるわ」


ダッシュエックス文庫
創刊宣言!
フェア開催中!!
豪華賞品を計5,550名様にプレゼント!!
くわしくは特設サイトへGO!
創刊宣言!フェア
検索